

■ ケープタウン大学英語英文学科主催「進歩の前哨所— ジョウゼフ・コンラッド、モダニズムと(ポスト)コロニアリズム」

Outposts of Progress: Joseph Conrad, Modernism and (Post)colonialism

日程・場所 2011年12月5日～11日、前半の発表がケープタウン大学の upper campus にあるアーツ(Arts)の広い講義室で12月5日と6日に、後半がケープタウンから87キロ西北に位置する Goedgedacht Olive Farm で、12月8日と9日に開かれた。上部キャンパスは高台にあり、テーブルマウンテンの麓に位置する。Goedgedacht は、西部沿岸部の黒人の農民に働き場所を与え、黒人の子供に教育を受ける農園である。

概要 E. Garnett に「コンゴへ行く前は、私は単なる動物に過ぎなかった」と述べたコンラッドのアフリカ体験は、文明、人種、植民地主義に対する考察を深め、「進歩の前哨所」「闇の奥」という2編の小説となった。小説の「進歩」というモチーフをめぐる、今日の問題を多様な角度から探求することが大会の目的である。招待講演2題と25本の口頭発表があった。発表の制限時間45分。進行役はケープタウン大学のゲイル・フィンチャム、ノルウェーからのジェレミー・ホーソン、ヤコブ・ルーテの3人である。

1日目、12月5日 招待講演‘Being Elsewhere’で、イスラエルのエルディナスト・ヴァルカンは、コンラッドと親交があった人類学者のマリノフスキが残した2冊の日記と『ロード・ジム』を検討し、マリノフスキがアボリジニとの生活の中で得た文明や社会構造に対する考察が『ロード・ジム』にどのように反映しているかを論じた。

午後、3本の口頭発表があった。フランスの Drosdal-Levillain は、ムンクの絵画を映像で示し、「七つ島のフレイア」の主題を探求した。ドイツ、キール大学の Frank Förster は、「闇の奥」「青春」『ロード・ジム』などの翻訳とそこに描かれている挿絵を映像で示しながら西欧諸国における受容史を語った。ケープタウン大学の Hedley Twidle は「マレー諸島のキプリングからカール高原のコンラッドまで」の中で、キプリングはボーア戦争を肯定したのに対しコンラッドは「笑止千万」としてこれを否定したことが、両者の文学界での評判の浮沈に影響していると語り、人種や民族の問題に対する両作家の考え方の差異を二人が交わした書簡によって丹念に論じた。

2日目、12月6日 午前中に4本、午後には6本の口頭発表があった。ヤコブ・ルーテは‘Distance, Reliability, Irony’と題し、物語論から「進歩の前哨所」を分析し、時間と空間を媒介にして「進歩」の概念が *ironic* に使われていると述べた。ジェレミー・ホーソンは、‘penetrate’、‘impenetrable’、‘penetration’という語がコンラッドの小説に多用されていると述べ、「入り込む」ことが出来ないものに、密林、海、暗黒、静寂、目、孤独、意図などがあると述べたあと、事例をテキストに即して示した。フィンチャム教授は‘Conrad’s Positioning of the Reader in the Marlow Narratives’と題し、フランスの Ben Lebdaï 教授は‘Images of Africa’と題し、それぞれ得意とする研究領域からコンラッドの作品を論じた。イギリスの Andrew Glazzard は、19世紀末イギリスの人種差別的な *fiction* を紹介し、「闇の奥」の背景を話した。このほか、ドイツの Kai Wiegandt は、人間と動物を分かち境界という視点から「進歩の前哨所」を論じ、「群衆」に埋没した二人の白人はアフリカに来る前からすでに「動物」的存在であったと述べた。社本は、「前哨所」のアイロニックな構成に注目しながら、二人の主人公がアフリカで自己崩壊した最大の要因は、両者ともヨーロッパの文明化社会で独立した思想を持たず個が確立していなかったことに求められることを論じた。

4日目、12月8日 二つ目の招待講演において、ドイツ在住のオーストラリア出身の学者 Russell West-Pavlov は、‘Heart of Darkness and its postcolonial, postmodernist, postpolitical and pedagogical avatars’と題し、「闇の奥」の影響を受けた英語圏の文学作品をスライド映写機によって多数紹介した。そのあと、「闇の奥」が大学の教材として各国でどのように読まれているかについて、*delegates* から各国の状況が報告され意見交換が行われた。12月8日はこのあと6本、9日は6本の発表があったが、紙数の関係で省略する。

所感 日ごろ書物を通して名前を知る研究者と食事を共にし、会話を交わしてその人柄に親しく接せられたことは無上の喜びである。食と住に関して言えば、行き届いた配慮が払われていたし、それらに対する経済的負担も軽微であった。アフリカはコンラッド文学に特別な意味を有するので、コンラッドに親しむ者は若いうちにせめて一度はアフリカを訪れてみるべきだろう。ケープタウンは活気に満ちた芸術的な町である。

— 社本雅信